

東工大 クロニクル



Tokyo Tech Chronicle

Contents

- 1 退職に寄せて
- 大学院理工学研究科 物性物理学専攻
奥田 雄一 教授
 - 大学院理工学研究科 化学工学専攻
ウィワット タンタパニチャクン 教授
 - 大学院理工学研究科 電子物理工学専攻
小長井 誠 教授
 - 大学院理工学研究科 建築学専攻
藤岡 洋保 教授
 - 大学院総合理工学研究科 人間環境システム専攻
大野 隆造 教授
 - 大学院総合理工学研究科 知能システム科学専攻
廣田 薫 教授
 - 精密工学研究所 先端材料部門
里 達雄 教授
 - 財務部主計課
新井 敏治
- 8 第3回生命理工国際シンポジウム 開催報告
- 10 スポーツ講座
「プロゴルファー、ここだけの話」開催報告
- 12 附属図書館大岡山本館をリニューアル
- 13 「生まれ変わる学び 生まれ変わる
チーズケーキ」開催報告
- 15 平成25年度の役職員の報酬・給与等について



No. 504
March 2015

退職に寄せて

永きにわたり本学の教育研究の発展に多大に貢献された教職員 40 名の方が、本年の 3 月をもちまして定年退職されます。本学を去るにあたってのお言葉を頂戴いたしましたので、ここに掲載させていただきます(順不同)。在職中はさまざまな楽しい思い出やご苦勞があり、感慨深いものとお察しいたします。どうぞ今後ますますお元気で活躍されるよう祈念しております。

退職に当たり

大学院理工学研究科 物性物理学専攻

奥田 雄一 教授

1988 年 6 月に東大物性研究所から理学部応用物理学科助教授として赴任して以来、アツという間の 27 年間でした。卒論の発表会が終わったのが 2 週間前で、学生の指導や研究室の整理に追われて、27 年間勤めていた職場を離れる感慨に耽るゆとりもありませんでした。しかし、本稿を書く頃になると種々の行事も次々と消化されて行き、何となく妙な気持ちになってきます。無重力になったようなふわふわした感じです。ふわふわして気持ちが良いのですが、どこへ行くかわからぬ不安感もあります。

東工大での大学人としての人生は充実したものだだと思います。とても恵まれた研究環境で自由に好きな研究ができたこと、自分の研究（低温物理）に興味を持って集まってくれた優秀な学生たちといろいろなことに挑戦できたことなど、忘れることのできない思い出がいっぱいです。やり残したこととか、伝えきれていないことがないわけではありませんが、あるとしてもほんの僅かです。

東工大は大きな教育改革・組織改革を控え、重要な局面にきています。もはやコメントする立場にはありませんが、この時期に一言メッセージを送りたいと思います。私の好きな著名な物理学者が、“**Students should be treated as scientists, not technicians**” と我々研究者に警鐘を鳴らしています。私はこの言葉に強い共感を覚えます。大学の教師は高等教育を通して人材育成をするという顔を持ちながら、その実態は自身の研究者としての発展を第一に考えがちです。東工大の教授ポストは、多くの研究者の憧れのポストです。その一番の理由は、優秀な理系に強い学生に恵まれているということでしょう。その若い力を自身の研究成果へつなげる期待感が強すぎると、妙なことになります。もちろん研究者として秀でて、大きな成果が出るのが人材育成あるいは教育にとって大切なことですが、学生を **Scientist** として育てるという視点を、大学人は常に意識しているべきだと思います。そういう視点に立って、教育改革、組織改革が実行されること、形式的な改革で終わらないように、そして、何より学生を **Scientist** として育てる方向につなげるように、心していただきたいと思っています。

私にとっての東工大はとても大事な故郷です。ここから優秀な **Scientist** が育っていくことこそが東工大の発展につながり、私も豊かな気持ちになります。

My Experiences with Japanese Universities



大学院理工学研究科 化学工学専攻
ウィワット タンタパニチャクン 教授

At 18 I first came to Japan in 1968 (Monbusho Scholarship) without knowing any Japanese. After 1 year of language study at Chiba University, I entered Dept. of Chem. Eng., Kyoto University, in the only year that University of Tokyo admitted no new freshmen. Due to budget constraint, all students could get valuable hands-on experiences in the laboratory designing and fabricating their experimental apparatuses. In any case, Japan's top universities managed not only to produce numerous Nobel Laureates but also to rank at the forefront of Asia's. In 1973 I continued my MS-PhD study in the USA as a RA. After graduation, I joined Chulalongkorn University in Bangkok and promptly started research collaborations with Japanese universities. In early 1980s I first visited TITech as part of JSPS-NRCT Research Collaboration Program in Petrochemical Engineering between Thailand and Japan. The Ookayama train station then was primitive and entirely different from what it is today. I met several Chem. Eng. professors, including Prof. Hiroo Niiyama, my TITech counterpart coordinator of this JSPS Program. In 1990 I helped translate/publish TITech retired Prof. S. Fujita's Japanese Handbook of Manufacturing Equipment in Chemical Industry, which became in effect the 1st Thai Chem. Eng. Handbook. Meanwhile, the top rankings in Asia of Japan's universities were soon overtaken by Univ. of Singapore and Hong Kong Univ. of Science and Technology. In 2011 I was unexpectedly recruited to join TITech. By then Prof. Hideki Shirakawa had won the 1st Nobel Prize for TITech and Mr. Naoto Kan became the first alumnus to be a Prime Minister. In conclusion, I am very proud to be a part of the world-class TITech and have high hope that top Japanese universities, including TITech and my alma mater Kyoto Univ., will soon rebound and raise their world rankings as stated in their long-term visions. By the way, our TITech's Dept. has produced the current President/CEO of the Petroleum Authority of Thailand (PTT), Dr. Pailin Chuchottavorn, who happened to be a CU Chem. Eng. senior student when I first joined CU. I'll join SCG Chemicals as a full-time Senior Research Advisor from April 1, 2015. Sayonara... and thanks to my TITech colleagues for everything.

日本の大学での経験

文部省の奨学生として私が初来日したのは1968年、18歳の時でした。当時の私は日本語の知識が全くないまま、1年間千葉大学で語学研修を受けることになり、翌年には京都大学化学工学科に入学することが出来ました。(その年は、学園紛争で東大の入試が無かった年でした。) 当時は、予算も限られていたため、学生自ら実験装置を設計・製作した実験室において貴重な実地経験を積むことが出来たのです。いずれにせよ、日本におけるトップクラスの大学は、数多くのノーベル賞受賞者を次々に輩出しただけでなく、アジアにおける教育機関で最前線にランク付けされることになりました。

私の話に戻りますが、学部卒業後の1973年に研究助手としてアメリカで修士および博士課程を修了した後、すぐバンコクのチュラロンコン大学に就任し、間もなくして日本の大学との共同研究を開始しました。そして1980年代の初頭、タイと日本の石油化学工学のJSPS-NRCT共同研究プログラムの一環として訪問したのがタイ側のまとめ役の私と東工大との正式な出会いだったのです。大岡山駅はまだ当時昔の姿で、今とは全く異

なっており、その時この JSPS プログラムにおける日本側のまとめ役である新山浩雄先生を始めとして化学工学専攻の先生方に初めてお目にかかりました。1990 年には、既にご退職されていた藤田教授の著書である『化学装置手帳 (和書)』の翻訳・出版に携わりました。その書はタイで事実上初の化学工学ハンドブックとなったのです。

その一方で、アジアにおける日本の大学ランキングは程なくしてシンガポール大学・香港技術大学に追い越されていきました。そして 2011 年、思いがけずこの東工大で採用される運びとなったのです。それまでに、白川英樹教授が東工大に初のノーベル賞をもたらし、また菅直人氏が卒業生として初の内閣総理大臣となった一ちょうどそんな時でありました。

結論として、私は世界レベルの東工大の一員であったことを大変誇りに思い、また東工大、そして私の母校京都大学など日本における優秀な大学は、長期的な展望のもと、きっと近い将来挽回を果たし、世界ランキングの上位に復活するということを切に願っております。

余談ではありますが、東工大の化学工学科の博士学生として学んだ Pailin Chuchottavorn 氏はタイ石油公社 (PTT) の現在の社長兼 CEO となっています。私がチュラロンコン大学に籍を置いたその年に偶然にも彼がちょうど 4 年生だったのです。一方、私は 2015 年 4 月 1 日より SCG ケミカルズの上級研究員として勤務することになっています。お世話になった東工大の皆様感謝しつつ、新しい職場でも精一杯頑張る所存です。さようなら、そしてありがとうございました。

東工大生活 47 年を振り返って

大学院理工学研究科 電子物理工学専攻
小長井 誠 教授

わたしは、東工大に入学してから、いままでずっと東工大人であった。1969 年、学部 1 年生から 2 年生に進級する際、どの学科を目指すか難しい判断であった。材料系か電子工学か？そんなある日、図書館でいろいろな専門書を眺めていると、伝田精一著「集積回路技術」という本が目にとまった。ペラペラとページを捲ったところで、簡単な集積回路の絵を見て感激を覚え、わたしの進路は電子工学に確定した。学生の頃は秋葉原で米国製の集積回路やニキシー管を購入してデジタル時計を作り、1 秒ごとにニキシー管の表示が変化するのがみて楽しんでた。これらのニキシー管デジタル時計は田舎に帰るときのお土産になった。

当時から比べると、この 45 年間の変化には凄まじいものがあった。トランジスタは 1 個 1 個の部品から、いまは 1 チップ上に素子数 10 億以上にも達する集積回路が製造されている。毎日使っている USB メモリーの容量の大きさには、ただただ驚くばかりである。わたしが専門としている太陽電池にも大きな変化があった。当時は、わずか出力 1 W レベルの話であったが、いまは、全世界で 1 億 kW を超す量の太陽光発電システムが導入されている。半導体集積回路にしても、太陽電池にしても、45 年の間に 10 の 10 乗以上の進化を遂げたのである。

東工大時代で一番やり甲斐のあった思い出深い仕事は、相澤学長、下河邊副学長のもとで仰せつかった研究戦略室の室長補佐である。相澤学長が就任されてから、初めて東工大にいくつかの「室」が設けられた。わたしは、研究戦略室の室長補佐として、まさにゼロからのスタート。下河邊副学長のもとで、研究戦略の在り方



1979年南3号館屋上で

を勉強させていただいた。この頃は、週2回、研究戦略室会議を開催していたが、新しい研究戦略策定の仕事は新鮮であるとともに、以降のわたしの研究組織作りにも大きな影響を与えた。研究戦略室では、まず本学教員の研究活動の visibility を高めることから着手した。また、東工大の教員は、個々の研究者としてはレベルが高いが、外から眺めてみるとチームとして動いている様子が見えない、などの意見をもとにイノベーション研究推進体を立ち上げ、これをもとに本学と企業との組織的連携の売り込みに努めた。この組織的連携は、いまでもたいへん上手く機能している。海外研究機関の産学連携の実態を調査するため、マックスプランク研究所、プリンストン大学、MITなどを研究戦略室メンバーや事務局職員の方々と訪問した記憶も鮮明に残っている。

学部に入学してから65歳になるまで、東工大での学生生活から始まり、教員としての教育・研究活動、「室」活動に至るまで愉快的毎日であった。東工大からの大きな支援に感謝している。

退職に際して—「ゆとり」と「信頼」の復活を願う



大学院理工学研究科 建築学専攻
藤岡 洋保 教授

東工大には、附属高校で教諭として3年、それに続いて建築学専攻で助教授・教授として31年間お世話になった。学生時代を含めると、40年あまりを大岡山キャンパスで過ごしたことになる。

その間に大学は大きく変わり、40年ばかり前の学生時代と比べると隔世の感がある。私が研究分野として選んだのは日本近代建築史で、まだ歴史の浅い分野だったこともあって、テーマや方法論を自分で考える必要があった。そのために手探りでさまざまなことを試み、そもそも建築史にはどのような方法論があるのか、その理論の枠組みはどのように変わってきたのかについてまで調べることになった。ずいぶん回り道をしたことになるが、試行錯誤を重ねたことがその後の研究の幅を拓けるのに大きく役立っているのも事実である。たとえば、テーマを探すため、複数の建築雑誌の数十年分を1ページずつめくりながら、メモをとる作業をしているうちに、当時の建築家の考え方やデザインの方法がいつの間にか頭に入っていて、建物や建築に関する事象を研究する際により深く、幅広い考察ができるようになった。

当時の日本社会には、そのような「無駄」を許容する「ゆとり」があり、そのおかげで私のような者でもなんとか研究者になれたわけである。学生時代に、湯島の岩崎邸（重要文化財）などの建物の実測図面を作成しながら設計趣旨を探る作業から多くのことを学べたのも、そのような「ゆとり」のおかげである。これは設計という行為を遡ることになるので、多くの時間と手間を要するが、設計者の意図を読み解くのに今でも有効な方法といえる。そのような作業を重ねるうちに、ひとつのテーマを深く掘り下げる経験が得られれば、ほかのテーマもそれと同等の深さで理解できるようになることを実感した。このようなことが許されたのは、当時の教官が学生を信頼し、自由にさせてくれたからだろう。この「ゆとり」と「信頼」のおかげで今日の私があるといってよい。

昨今の日本社会では、その2つとも希薄になっている。時代が変わったということだろうし、そのような悠長なことをやっているには競争に勝てないということなのだろうが、いい研究のために、この2つの条件は今でも有効なはずである。厳しい競争に生き残るための教育・研究環境の整備とともに、学生が大きく育っていくように、この「ゆとり」と「信頼」にも目を向けていただければと思う。

学び・教え・研究の奇跡



大学院総合理工学研究科 人間環境システム専攻
大野 隆造 教授

東工大を退職するのは今回で2度目です。前回は神戸大学に助教授として赴任するにあたって工学部建築学科の助手を1986年3月に退職しました。赴任当時、神戸大学には東工大出身の教員は私以外誰もいなくて寂しかったのですが、しばらくして、その前年まで神戸大学の学長だった堯天義久先生（1944年建築学科卒）が声をかけてくださり、おかげで関西での人の輪を広げることができました。

1995年1月に阪神大震災を体験し、その4月にすずかけ台キャンパスにできたての人間環境システム専攻に着任しました。この専攻名は、建築・都市環境での人間心理・行動を研究する私の専門とぴったりでとても気に入りましたが、それだけでなく全国から多くの学生を研究室に迎える恰好の看板ともなりました。着任して8年目には、地震防災に関する21世紀COE、引き続いてGCOEプログラムの研究グループに加えて頂き、神戸で被災したときから何か災害研究に貢献できないかと思っていたことが実現し、国内外の被災地のフィールド調査など、研究の幅を広げることができました。

先日の最終講義では「私の学び・教え・研究の軌跡」と題して話しましたが、その準備をしているときに、今年の1月に直木賞を受けた西加奈子さんが、最初に本を出してくれた出版社の編集者との出会いから今までの思いを綴った次のようなコラムを見つけました。「私が10年間作家を続けて来られたことが奇跡だし、（編集者の）Iさんが私に出逢ってくださったことが奇跡だし、私が私としてずっと生きてきたことが奇跡だと思った。」これを読んで、私の辿った軌跡も「奇跡」の積み重ねであったことに気付きました。自分が歩んできた道を振り返ってみると、その分岐点ではいつも誰かが大きな役割を果たしてくれていたのです。これは私だけのことではなく、おそらく誰にとってもその長い人生の道程において、いつかどこかで経験することだと思います。しかし、私は東工大で学び・教え・研究できたことでとても多くの貴重な機会が頂けたと感謝しています。これから東工大で学ぶ方、教える方、研究する方が、人との出会いの機会を大切にすべく、実りの大きな奇跡を起されることを念じています。

出藍の誉れ



大学院総合理工学研究科 知能システム科学専攻
廣田 薫 教授

大岡山キャンパスで9年間の学生生活を送った後、他の2つの大学で教員生活を経験し、第3の職場として総理工システム科学専攻に着任してから20年以上経ちました。この春、第4の職場に移るに際し、これまでの自分を振り返る機会を頂戴しましたので、小文にまとめます。

最初から研究者になりたくて学園紛争末期の大岡山キャンパスに来て、分野としては強電から弱電そして（当時つぼみ状態の）情報に落ち着き、計算知能(CI: Computational Intelligence、日本語名は私自身がつけたものです)をライフワークとすることになりました。知的制御・ロボット・画像・マルチメディア・スケジューリング等々多数の応用分野で研究を進めて、ジャーナル論文300・国際会議論文550・単行本50冊ほどをまとめることが出来、論文賞などの受賞50件・世界の8大学から名誉博士/教授の称号をいただき、

等々と言ってもつまらないので、もう少し自分で信念を持って取り組んだことを1つだけ紹介したいと思いません。

恩師に言われてずっと気にかけてきた事に「母国語のみで最高学府まで通せる国はそんなに多くない。良い研究をしたら日本語の論文にまとめよう。それが、本当に良い研究なら、外国の研究者が日本語を勉強してもその論文を読んでもくれるはずだ。」とか「出藍の誉れ：学生は師を超えなければ発展が無い。」があります(時代は学園紛争末期で日本が世界に進出する前です)。しかし私は、不肖の弟子で、Dr2年の時、自ら100万円ほどの民間ファンドをゲットし、国際会議論文をまとめて、羽田からハワイ経由で西海岸に渡り(当時成田はまだ無く、西海岸まで一気には飛べなかった)、アメリカパスを使ってグレーハウンドのバスで1ヶ月間米国を周遊してきました。もちろん先生には内緒で、途中お詫びの手紙を航空便で出しましたが、帰国後は破門を覚悟していました。しかし、先生からは叱責されて潰されることは無く、黙認していただきました(教訓：主義主張は違っても、なにかやりそうなら見守ろう!)。その後、その恩を返すべく私がやったことを列挙すれば、1) 計算知能の英文論文誌を日本発で発刊し続けて19年、2) 28カ国から100人以上の留学生や研究員を受け入れて学位取得指導、3) 国際学会を設立して、日本代表・秘書・会計・副会長・会長など全ての役職を経験、4) 5つほどの国際会議を創立し、隔年開催で継続運営、などなどがあります。恩師は先日卒寿のお祝いを迎えられ、まだまだ健在です。それに比べれば、私などは、もう一仕事二仕事頑張らねばと心に誓って、胸ときめく春を迎えようとしています。

退職に当たって思いおこすこと



精密工学研究所 先端材料部門
里 達雄 教授

この3月にいよいよ本学を定年退職することとなりました。思いおこせば36年もの間勤めたことになり、学部入学から数えますと45年間本学にお世話になりました。感慨深いものがあります。入学当時は鹿児島島の小さな離島から出てきた身には不安と期待とが交錯していたことを思い出します。いわゆる学園紛争がまだ収束していない頃で、機動隊の車両が構内に待機していたり、授業も十分には行われない中での学生生活スタートでした。当時は公害問題が様々に叫ばれ、理工系大学で学ぶことの意味

を考えようと仲間で小さなサークルを作り、環境問題について熱い議論をしたことを思い出します。昨今、地球環境問題が大きくクローズアップされるようになりましたが、当時はこの状況は思いも及ばぬことでした。

卒業研究として、金属工学科の非鉄金属材料学講座に配属され、以来、アルミニウムや銅合金を中心とした非鉄金属材料の研究を続けてきました。当時の高橋恒夫先生、神尾彰彦先生、小島陽先生、村上雄先生はじめ研究室の皆様が熱心な指導を受け、楽しい研究生活を送ることができました。1988年から89年にかけて約1年間英国のマンチェスター大学に客員研究員として留学し、主に高分解能分析電顕の勉強をしてきました。分析電顕の草分けとも言えるべきLorimer教授のもとで、最先端の極微小領域分析を学ぶことができました。帰国したときは年号が「昭和」から「平成」に代わっていました。

2012年4月から所属が理工学研究科材料工学専攻からずかけ台の精密工学研究所に変わりました。それまで長い間岡山で過ごして来ましたので環境の変化に当初とまどいもありましたが、精研の皆様が暖かく迎えていただき、楽しい時間を過ごすことができました。精研では相互交流をはかる様々な催し物があり、異なる分野の先生方とフランクに話ができて、大変有意義なことと感じ入りました。

毎年、研究室を卒業して行く学生には研究室の学生たちから温かいメッセージが贈られ、私からも学生一人一人にその学生に合うと思う四字熟語の色紙を贈ってきました。私は学生に教えたというより、学生からより

多くを学んだと思っています。長くお付き合い頂いた学内外の先生方、学協会の皆様、企業の皆様に心から感謝申し上げます。また、長きにわたりご尽力いただいた本学キャリア支援専門委員会のアドバイザーの先生方、事務方の皆様にも厚くお礼申し上げます。本学はいま大きな変革の真ただ中にあります。これからは学外から眺めることとなりますが、母校にはいつも愛着を感じており、今後の大いなる発展を祈念いたしております。長い間、本当に有難うございました。

最後の守衛長

財務部主計課
新井 敏治



昔の守衛所

私は、1979年5月に経理部経理課用度掛守衛として採用され、今日まで35年11か月、多くの方々の温かいご指導、ご支援を賜り、大過なく勤務できたことに、深く感謝申し上げます。

当初は、私を含めて20人の大所帯でしたが、とうとう、守衛所職員は、私1人となりました。これからは、警備会社にバトンタッチです。

一番の思い出は、2000年4月より、正門守衛所の建物の庇（ひさし）が丸くなったことです。それまでは、四角い建物（写真上）でした。これは、新しく西8号館に、防災センターが設置されたことに伴い、守衛所内に監視室を設けるため、新しい正門守衛所が出来たことによるものです。



現在の守衛所

次に、2004年4月に東工大が国立大学法人になったことで、翌年の2005年4月より、職場にパソコンが導入されました。それまでは自分をアナログな人間だと思っていましたが（例：出勤簿にハンコを押していた等）、ワードの文章、エクセル、デジカメの写真取り込み、電子メールの送受信等、勤務しながらではありますが、おかげでパソコンも出来るようになったことは、自分の宝物となりました。

退職後は、何よりも健康一番で、これからも第二の人生を謳歌していきたいと思います。

最後に本学のますますの発展と、皆々様のご健康、ご活躍をお祈りして、挨拶とさせていただきます。

第3回生命理工国際シンポジウム 開催報告

1月14日に、東工大すずかけ台キャンパス内すずかけホールにて、第3回生命理工国際シンポジウム「Innovative approaches to biological systems: light, motion, and small molecules」を、大学院生命理工学研究科と情報生命博士教育院（ACLS）とで共同開催しました。

このシンポジウムは、生命理工学研究科創設20周年を機に、特に若い研究者が、

- 1.早い時期にトップレベルのサイエンスに触れる
- 2.分野を越えたホットトピックに触れる
- 3.国際的に活躍する研究者の研究スタイルを学ぶ

ことのできる環境を提供しようと、2012年度から始めました。

今年度は、2名の国外招待講演者、3名の国内招待講演者、2名の学内講演者から、新しい切り口で生命現象を理解する研究、そしてそれを応用に結びつける最先端の研究について講演していただきました。

最初のセッションでは、Klaas J. Hellingwerf 教授（オランダ・アムステルダム大）と太田啓之教授（東工大）より、糖や油脂といった有用物質生産を効率よく行う細胞の構築を目指した最先端の研究が紹介されました。



Klaas J. Hellingwerf 教授



太田啓之教授

2番目のセッションでは、Jaebum Choo 教授（韓国・漢陽大学）、中川秀彦教授（名古屋市立大学）と和地正明教授（東工大）より、細胞機能・腫瘍マーカーの検出や薬剤のスクリーニングを効率よく行う新しい技術開発に関して講演がありました。



Jaebum Choo 教授



中川秀彦教授



和地正明教授

最後のセッションでは、松崎政紀教授（基礎生物学研究所）と野地博行教授（東京大学）より、脳神経の活動やタンパク質一分子解析を可能とする、最先端の実験技術・研究手法に関して講演がありました。



松崎政紀教授



野地博行教授



シンポジウム後の全体写真

最先端の研究は時により、理学と工学、基礎と応用そしてマイクロとマクロなスケールが混在します。今回のシンポジウムを通じて、参加者にはその点を感じてもらえたのではないかと思います。

参加人数は 269 名で、過去二回に引き続き大変盛況でした。生命理工国際シンポジウム組織委員会は、今後も質の高い国際シンポジウムを継続して開催し、特に若い大学院生や研究者に、国際的に活躍する第一線の研究者と交流する機会を提供していきたいと考えています。

スポーツ講座 「プロゴルファー、ここだけの話」開催報告

2015年1月13日(火) 17:30 から 19:00 まで大岡山キャンパス西9号館デジタル多目的ホールで「プロゴルファー、ここだけの話」という演題で本年度のスポーツ講座が開催されました。17回目となるスポーツ講座ですが、このスポーツ講座は「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の大学連携イベント」として行いました。

今回はTBSテレビサンデーモーニングで屋根裏のプロゴルファーとしてお馴染みのタケ小山(小山武明)さんと元日本テレビアナウンサー、フリーアナウンサー吉田填一郎さんをお招きし、プロゴルファーのエピソード、プロゴルファーそしてゴルフ解説者として活躍するタケ小山さんの半生、そしてオリンピックへの思いを語っていただきました。



タケ小山さん

タケ小山さんは1989年6月に渡米し各国のツアーを転戦。1996年、世界初の米国ゴルフ専門局・ザ・ゴルフチャンネルでの解説をスタートした当初から、視聴者からのFAXやメールを使い双方間放送を実現され、米国在住ながら各メディアからの執筆、コメント依頼などが殺到し同時に解説者としても認知されました。2008年には早稲田大学大学院にてスポーツマネジメント・スポーツ科学修士を終了し、各界のスポーツ関係者との親交も深い方です。また、数年に渡り、年間40試合×4日間×3時間放送(年間480時間)のゴルフトーナメントを担当してきた解説は、他の追従を許さないことはサンデーモーニングをご覧になればよくわかると思います。

吉田填一郎さんは1969年約1000倍の難関を突破しアナウンサーとして日本テレビに入社され、1969年～2003年日本テレビアナウンサー、2004年～2011年ラジオ日本アナウンサーとして活躍されました。巨人戦の野球中継をテレビ・ラジオで約700試合を担当し、1994年、2000年の日本シリーズ長島巨人日本一を実況されました。ゴルフでは1983年ハワイアンオープン青木功優勝を実況し、その他、箱根駅伝、アメリカンフットボール第23回スーパーボウルなども担当されました。「スポーツでは同じ場面はない。一期一会。」名場面に遭遇する幸運を待ち、その一瞬に最高のコメントをつけられるよう準備するのを信条として現在フリーアナウンサーとして活躍されています。

まず、スポーツ講座の直前に「サンデーモーニング」で話題になっていた松山英樹選手の話から始まりました。プロゴルフ協会は松山英樹、石川遼選手が日本でプレイして欲しいと、昨年3月にルールを変えました。松山選手は制裁金を払ってアメリカのツアーに行っています。これに関してタケ小山さんは説明したかったそうですが、何しろタケ小山さんが番組で持っている時間はVTRが2分、解説が2分でとても説明しきれないのだそうです。しかも、時間調整がタケ小山さんの出演部分で入る時もあり、場合によっては急に1分に削られることもあるのです。テレビの裏側を垣間見ることができました。そのあと、松山英樹、石川遼、青木功、中嶋常幸、ジャンボ尾崎各選手



吉田填一郎さん

などのエピソードを紹介していただきました。そして、下記のような講演をしていただきました。

「タケ小山さんの経歴」

少年時代は野球、バンドをやっていました。大学卒業後 25 歳のとき、知り合いの持っているフロリダにあるゴルフクラブに行き、はじめは英語がわからなかったのが英語を使わなくてよい仕事をしながら試合に出ていました。1995 年に出来たゴルフチャンネルが解説者を探していたところ、アメリカで働く資格を持っていたタケ小山さんにその仕事が回ってきました。それで年収が 3 倍になりました。日本語を話せて働ける人がほかにいないので年収の交渉で強く出ることができたためです。そしてマイケルチャンを始め錦織圭選手など有名なテニス選手を多く生み出すフロリダの地域で生活していました。2007 年にプロゴルファーとして日本に戻りましたが、2008 年の出場資格は得られませんでした。それで先輩の勧めで早稲田の大学院に入り、そこでゴルフのビジネスについて研究するとともに他のスポーツの状況もよく分かりました。

「ゴルフについて語る」

プロゴルフ界を盛り上げるにはヒーローが必要です。そして、ギャラリーを増やすためにはギャラリーの入場料収入を賞金にして、プロゴルファーもギャラリーに頭を下げるようにしたほうがよい。日本女子プロゴルフも世界のトーナメント数になったが、放映権料などの権利を押さえていないのでビジネスとして発展性はありません。そのあたりを日本のプロゴルフ界は変えていった方がいいと思います。



ゴルフについて語る

ゴルフ人口が減っているが、高齢化、若い人が始めないのが原因だと思います。いまブームなのはマラソン。お金がかからないからです。ゴルフももっと安くできないかという意見もあるが、高くても素晴らしいコース、素晴らしくはないが安くできるコースなどの差別があつていいと思います。ゴルフのプレイに時間がかかるという意見もありますが、9 ホールでランチというのは日本だけです。日本のゴルフビジネスはそうなっているけれど、そうでなくてもいいと思います。また、日本のゴルフコースは人件費がかかりすぎているからビジネスとして難しくなっています。アメリカは安くできる。それはアメリカでは 5 つぐらいのクラスにゴルフコースが

分けられるからです。それでとても安くプレイすることもできるのです。

ゴルフの魅力は肉体的に負担が少ないことです。だから長く続けられるし、年をとって始めても追いつけます。力がなくて遠くにボールを飛ばせなくて自分でティーを選べるので大丈夫。統計では 2.7 年で 100 を切れない人がやめてしまいます。その前にゴルフの楽しさを感じてほしいと思います。ゴルフは本来一人で行って、知らない人と組むものです。これから始める人はコースに行つて芝の上でゴルフをすれば楽しいと感じると思います。吉田さんとは意見が違いますが、練習場に行く必要はありません。海外には練習場がないくらいです。クラブは 1 本でいいです。パブリックに行けばドレスコードもない。なんとか塾で頭叩いて子供にゴルフを教えているようですが、それではゴルフのおもしろさが分かりません。コースに出てゴルフというゲームを楽しむことを教えるのがよいと思います。

「質問：オリンピックの開催コースは決まりなのでしょうか？」

現在の計画では射撃とゴルフの 2 競技だけパブリックではありません。射撃は自衛隊の基地で仕方がない。ゴルフはオリンピック後、その場所をクラブのメンバーでしか使えない状態です。これではオリンピックのレガシーを国民が共有できません。ですから日本ゴルフ改革会議で誰でも利用できる江東区の「若洲ゴルフリン

クス」にすることを提案する意見書を出しました。皆さんも応援してください。



集合写真

興味深い講演で、あっという間に時間が過ぎました。普段、理工系の講義や研究に多くの時間を費やす東工大の学生にとってはスポーツという異分野の話聞くことができ、視野を広げる有意義な対談となったと思います。

附属図書館大岡山本館をリニューアル

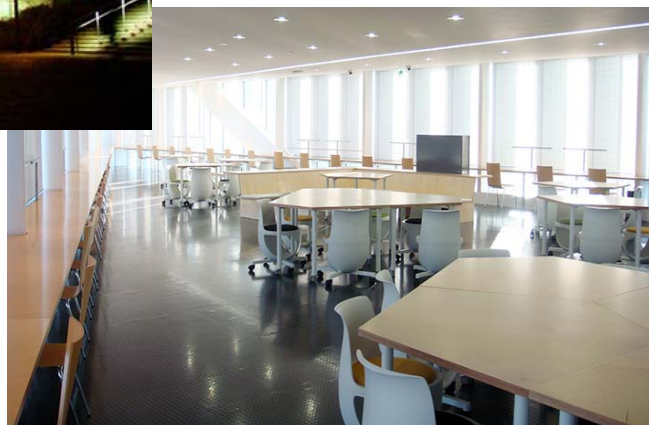
1月6日、附属図書館は大岡山本館の地上階部分（通称“チーズケーキ”）を、グループ学修が可能なエリアにリニューアルしました。



リニューアル予告のライトアップ

また、2階には相談員が在席し、図書館の活用方法等について相談ができるようになりました。その他にも、図書館の職員が講師となり、資料の探し方やデータベースの使い方に関するセミナーを開催するなど、施設面だけでなく、サービス面での充実も行っています。

大きな変更点として、2階の机や椅子を自由に組み替えられる可動式のものに一新したことがあげられます。友人と相談しながらの学修や、大人数で議論を行うグループ学修など、さまざまな学修スタイルに対応可能な空間となっています。



2階グループ学修エリア

※附属図書館大岡山本館の2階、3階は学内者向けのスペースです。一般の方はご利用いただけませんのでご了承ください。

「生まれ変わる学び 生まれ変わるチーズケーキ」 開催報告

附属図書館大岡山本館の2階・3階（通称"チーズケーキ"）が1月6日にリニューアルオープンしたことを記念して、リベラルアーツセンターと附属図書館主催のイベントを実施しました。

はじめに、高橋栄一附属図書館長（大学院理工学研究科地球惑星科学専攻）からリニューアルしたフロアについて簡単に紹介がありました。2階は可動式什器を導入したことにより、様々な人数での学修に対応できるようになりました。3階は従来通りグループ用の学修室が利用できます。

第1部 ニューイヤートーク「今年を読もう！新聞を読もう！」



池上教授のニューイヤートーク

池上彰教授（リベラルアーツセンター）

池上彰教授が元日の大手新聞6紙を題材に、新聞の読み解き方や新聞制作の裏話などを語りました。一面記事や年始シリーズから読み取れる各社の意図や問題意識、出版社の広告から見える想定読者層といった内容が解説され、参加者に新聞を読む際の新しい視点が示されました。また、通常あまり意識されない新聞の版数を取り上げ、同じ新聞でも配達地域によって早版と遅版があり、見出しや内容が異なることがあるという豆知識も紹介されました。会場からはウェブが普及している状況下での紙の新聞の役割は何かという質問があり、池上教授が紙とウェブそれぞれの利点と、ウェブを利用する

際の注意点を回答しました。参加者は、時折ジョークを交えたわかりやすい解説に興味深く耳を傾けました。



満員の会場

第2部 対談「アクティブ・ラーニングってなに?～大学図書館の新しいあり方について～」

高橋栄一附属図書館長×池上彰教授

高橋附属図書館長が、電子資料が普及する中での附属図書館利用者の推移と国内外の大学図書館の先進事例を話題提供し、池上教授と大学図書館の新しいあり方について対談しました。中央教育審議会による「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、生涯学び続ける力を習得するには、大学教育を能動的学修（アクティブ・ラーニング）へ転換する必要があるとされています。



高橋附属図書館長と池上教授の対談

今回の附属図書館のリニューアルは、本学の教育改革によって増加することが予想されるアクティブ・ラーニングに対応するものです。国内外の事例では、アクティブ・ラーニングに資する施設であるラーニング・commonsを中心に、大学図書館の取り組みが紹介されました。池上教授は海外の大学の視察経験もふまえて、本学には講義室外で自由に議論できる場所が少ないので、そのような場所が附属図書館内にできたことが喜ばしいと話しました。参加者からは、学外の友人や研究者と話し合える場所を設置することはできないか、すずかけ台キャンパスでも教養授業を実施したり図書館でイベントを開催したりしてほしい、といった質問・要望が寄せられ、今後の大学や附属図書館の活動における課題が得られました。池上教授からは、イベントなどやりたいことがあれば自分でやってみる姿勢も大事だ、というコメントがありました。

最後に、高橋附属図書館長が、学修支援機能強化やその他のサービスの充実を実施するにあたり、附属図書館だけでできることには限りがあるので、学生や教職員の力を借りていきたい、学生も今回のイベントのように図書館でやりたいことがあったら提案してほしいと締めくくりました。

今回のイベントには学生および教職員が約120人参加し、会場となった附属図書館大岡山本館の2階フロアを埋めつくしました。附属図書館にとっては、新しくなったスペースを多くの方に見てもらうこと、また学修支援に関するイベント開催という新しい取り組みを提示することができる機会となりました。

今後も附属図書館では学修支援に関するさまざまな取り組みを実施していきます。

平成 25 年度の役職員の報酬・給与等について

本学における平成 25 年度の役員の報酬及び職員の給与の水準について、以下の URL で閲覧可能ですので、お知らせいたします。

<http://www.jinjika.jim.titech.ac.jp/kouhyou/kouhyou25.pdf>

内容

I 役員報酬等について

- 1 役員報酬についての基本方針に関する事項
 - ①平成 25 年度における役員報酬についての業績反映のさせ方
 - ②役員報酬基準の改定内容
- 2 役員の報酬等の支給状況
- 3 役員の退職手当の支給状況（平成 25 年度中に退職手当を支給された退職者の状況）

II 職員給与について

- 1 職員給与についての基本方針に関する事項
 - ①人件費管理の基本方針
 - ②職員給与決定の基本方針
 - ア 給与水準の決定に際しての考慮事項とその考え方
 - イ 職員の発揮した能率又は職員の勤務成績の給与への反映方法についての考え方
 - ウ 平成 25 年度における給与制度の主な改正点
- 2 職員給与の支給状況
 - ①職種別支給状況
 - ②年間給与の分布状況（事務・技術職員／教育職員（大学教員））
 - ③職級別在職状況等（平成 26 年 4 月 1 日現在）
（事務・技術職員／教育職員（大学教員））
 - ④賞与（平成 25 年度）における査定部分の比率
（事務・技術職員／教育職員（大学教員））
 - ⑤職員と国家公務員及び他の国立大学法人等との給与水準（年額）の比較指標
（事務・技術職員／教育職員（大学教員））

III 総人件費について

東工大クロニクル No.504

平成27年3月31日 東京工業大学広報センター発行

©東工大クロニクル企画チーム

編集長 小野 功（大学院総合理工学研究科准教授）

陣内 修（大学院理工学研究科准教授）

住所：〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1-E3-13

TEL:03-5734-2975, 2976 FAX:03-5734-3661

E-mail:publication@jim.titech.ac.jp

URL: <http://www.titech.ac.jp/about/overview/publications.html#h3-7>

ISSN 1349-9300